
屋上

ミニマスコット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋上

【Nコード】

N5275R

【作者名】

ミニマスコット

【あらすじ】

お調子者で常にハイテンションいつも笑ってるアホなコ。それが私のみんなのイメージ。でも本当のは私はたしかにお調子者でアホなコだけど別にいつも笑ってるわけじゃない。本当の私は

泣き虫だ。

(前書き)

初めて書いてみました・・・
相当ひどいですが読んでもらえるとうれしいです
泣
結構前より直しました 汗

お調子者で常にハイテンション。
いつも笑ってるアホなコ。

これがみんなが私に持つイメージ。

でもほんとの私は確かにお調子者でテンション高いシアホだけど
別に常にハイテンションじゃない。

それに

たいしたことでもないのにすぐに泣く。

何でか自分でもわかんないけど　すぐ涙が出る。

そんな私は人前で泣かないために　ウザがられない様に　イメー
ジが壊れないように
一人で泣く場所がある。

ここにはなぜだか人が来ない。
だから今日も私は一人　屋上へ向かう。

屋上からはグラウンドが見える。

私はそこからいつもみんなを見てる。

ていうわけじゃなくて

昼休みになると友達と毎日サッカーをしている 彼 を見てる。

私は 彼 が好きなんだと思う。

楽しそうにみんなと笑う 彼 が。

彼 を見るとなんだかいつもより早く涙が引っ込む。
気がする。

「うわあーまじで？地理25点？勇氣もらうわあ！」

「でしょ？あたしに比べればみんな全然ひどくないって！」

「25点てまじ？留年すんなよー！」

「いやあーん！そんな怖いこと言わないでえー！」

「ぎゃははは」

だから今日も私は屋上へ行く。

がちや

なのになんでこいつがいるんだ・・・
なんとまあ　ずいぶんと安らかな睡眠を取られてること。

ざけんな。

でもしょうがない。

泣いてるところを人に見られるわけにはいかないし我慢するしかない。
ない。

とりあえずどっかひとりになれる場所をさがしに行く。

「どーしたのさ」

背筋が凍った。

「おろ？寝るの邪魔しちゃったようだね！あいむそーりー！しかし キミのように紳士で 女子にモテる人なら怒るようなことはないだろう！じゃあ睡眠を続けてくれたまえ！アディオス！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

くそう！敵はなんて強いんだ！
そこは おうよ！ とかいえよ！

とか思っていた私は少し気が緩んでいたのかもしれない。

「なんで泣きそうなの？」

つい涙のストッパーがはずれた。

これじゃあ常に明るいイメージが丸つぶれだ
どうにかなみだを止めようにも止まらない。

くそお・・・・・・・・・・・・・・・・っ

「いつもここで泣いてるよね」

!?

「あといつもサッカー部の人をニヤニヤしながら見てるよねえ」

「ニヤニヤなんかしてない！」

私と同じクラスで隣の席に座ってるこのモテ男はつねにクールで
人気の無口君。

「あいつの事好きなんだろう？」

なのになんでこんなに今日はしゃべるんだよ！

「好きじゃない！」

ぜえはあ

「今日のアンタはずいぶんとおしゃべりじゃないの？」
「そうかもね」

「もしかしていつもの無口キャラは作ってんじゃないの？」
「おまえもだろ」

おまえ も ？

「・・・・・・作ってんの？」
「作ってるってゆーか」
「ツクッテルッテユーカ？」

「入学してすぐはのど痛くて喋んなかったら無口キャラになって
たから今頃変えることもできなくなってるだけ」

「・・・ヘタレ？」
「おまえもな」

いやいや！クールなモテ男が実はヘタレなだけでしたってうける
だろ 笑

「泣き止んだな」

!!

そういえば確かに・・・

「さすが紳士・・・私を慰めるためにわざとイジワルって気を逸らしてくれたのね・・・！」

やーん!!!! 睨まないでえ!!!!

「ところで あんたっていつもイチゴミルク飲んでるの？」

「悪い？」

「ホントイメージと違うんだねえ 笑」

「おまえもイメージとは違うけどな」

うう・・・

「あのね？この場所ってなぜか誰も来ないから私いつもここに泣

きにくるの」

「だからあんたもここで無口じゃないあんたを出せば？」

「そうだな」

アンタ を屋上へ来るように進めたのは仲間を見つけたと思った
からなのか

それとも善意なのか

はたまた ただの気まぐれか

キンコーンカーンコーン

放課後を伝えるチャイムが鳴る。

いつも一緒に帰る友達を探しに他の教室へ行く。

「じゃあ帰りますか」

「ねーねー今日カラオケ寄って行こうよおー」

「ちょっといいかな？」

私は呼吸するのを忘れた。

目の前に 彼 が立っていたから。

「佐藤君？ 今から？」

「うん。駄目かな？」

「あー・・・カラオケは今度でいいかな？」

「うん？ いいよ」

反射的に答えた。

これから 彼は友達にコクるのだろうか。

「ごめんね じゃあまたね？」

私は屋上に来ていた。

「おい！！！！」

なんか笑えてきた。

「あはは。あれ絶対告ってるよねえ」

「まだわかんないだろ！俺も聞いてたけど呼ばれてただけじゃねえか！」

放課後呼び出しとか完全そうゆうかんじじゃなか。

「それでおまえはあきらめられんのか？」

気付いたら私は走り出していた。

彼 がどこにいるかもわからないけどとにかくめっちゃくちゃに探して走った。

「あははは ふられちゃったよ」

「やっぱあれ告白だったわあー あのふたり付合ってたってー」
なんか思ったよりショックが小さかった。

本当に私は 彼 が好きだったのだろうか。

今考えたらそんなに好きじゃなかったかも・・・うん。

あれ？

なんか涙出るわあー・・・

そんなに辛くもないのになぜか涙が出るんだろう。
いつも思うんだけどなんでかな。

あーとまんね。

「なあ」

アンタに　ここ　へ来るようにすすめたのは

「甘いものって女の子の涙を止める魔法だって知ってる？」

「ぶっ　イメージと全然違うし　しかも私甘いのが苦手だし　ごめんね？」

こうやって新しく涙を止めてくれる人を作るためだったのか

「でも一回くらい試してみるのもいいかも」

それともただ同情したのか

私は　アンタ　からイチゴミルクを奪って飲んだ。

はたまた　自分だけが知ってる彼を守りたかったのか

「涙止まらなかった？」

左手にイチゴミルク。

「止まった」

右手に アンタ の手を握る。

恋を知らない 私にはまだわからない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5275r/>

屋上

2011年11月15日15時11分発行